

【視 点】

公共事業におけるリダンダンシィについて

土地総合研究所
理事調査部長
山 邊 俊 明

リダンダンシィ (redundancy) とは、「余分」という意味です。何の機会であったか覚えていませんが、旧国土庁に出向していた時に、当時の M 課長から教わりました。新鮮な感じがして、以来使っています。

何事に関しても、余分が必要です。あまりキチキチに作ってしまうと、当初の見込みにはなかったような事態が発生した場合、対応が出来ません。最近の公共事業をめぐる議論を見ますと、余分については全く考慮されずに、すべてが余計、無駄であるという主張が目につきます。

「余分」と「余計」とは、違います。例えば、確率的に考えて、時間雨量 50 mm の雨に耐えることが出来るように河川の整備が行われたとして、60 mm の雨が降った時には、氾濫してしまう恐れがあります。過去のデータに基づいて設計すれば、50 mm とした場合、想定される雨の内の例えば 95% には対応出来るはずですが。

しかし、対応出来ない残りが 5% あります。これを仮に、2% に引き下げることを余計、無駄と考えるのか、必要な余分と考えるのかといったような点については、あまり議論がされていないように思われます。費用対効果に関する検討が必要であることは、明らかですが、万が一の時に備えられるようにしておくことも必要でしょう。

都市の空間についても余分がほとんどありません。まとまった空き地がないのです。一番身近な空き地としては、小学校や中学校の校庭がありますが、現在通学している生徒に限られるとか、部活で使われているので開放出来ないというのが現状です。

筆者は、休日には、ラジコン等で遊ぶことがあります。これまで、その遊び場を確保するのに苦労しました。最近、ようやく、適地が見つかりました。なんと隅田川の河川敷なのです。両国橋の下流です。きちんと舗装されています。

先ほど述べた河川の整備に関係することですが、戦後最大級の台風に耐えられるという整備目標がほぼ達成されつつある現在、河川を巡る環境整備に力が入られるようになっているのです。親水性を織り込んだ河川事業です。昔の人から見れば、余計、無駄と思われるかも知れませんが、現在の都市住民にとっては、貴重な余分なのです。

しかし、ここにも時間制限があります。午前中は、釣り人が竿を垂れていたり、詩吟を唸っている高齢者等々で賑わっています。筆者は、人影がまばらとなった午後の日が少し翳った頃から、この貴重で余分な空間を活用しているところです。